

くしろ
釧路の冬（大野恵造）

りゅうひょう
流水の 漂う 海を 前にして

ヒシと 寄り添う 友千鳥

啄木作の短歌

死にたくは ないかと 云えば

これ見よと 咽喉の きずを

見せし 女かな

さらば 生きむと 白玉の

うなじに キスを 与えつつ

手を 携えて 月の 夜の

渚 歩めば おちかたの

灯れる 宿は その名 さえ

あすに つながる

あすに つながる 喜望楼

解説 大野恵造作の「啄木の四季」の一節。

明治四十年九月、小国露堂の薦めもあり、小樽日報の創業に参加することになった。その年十月に第一号を創刊した。小樽日報では同僚に野口雨情がいた。当時の主筆の岩泉江東が独断で思うままに事を処理する態度に対抗し、持ち前の、不満な現状を打ち壊すことから始める性格が出て、雨情と共に社内肅正運動を起こし、江東の追放に成功したが、事務長の小林寅吉から暴力をふるわれたことを契機として退社。たった五ヶ月の小樽滞在であった。小樽日報社長の白石義郎は啄木の才能を惜しみ、自身が経営する釧路新聞社の入社を勧めた。啄木が釧路駅に着いた日は雪が燦々と降る夜であった。この釧路で啄木は新聞社の記者として喜望楼に入入りし、芸者「小奴」と知り合う。

語釈 ※友千鳥＝群れ集まっている千鳥。

男女。

※咽喉Ⅱのど。※おちかた＝遠くの所。ずっと向こうの方。※喜望楼Ⅱこの当時の釧路第一級の料理屋。芸者「小奴」が出入りした場所。

通釈 流水が漂う海に寄り添う男女。

短歌 啄木が小奴に死にたくないかと言うと、小奴は喉の傷を見せ、過去に自殺をして喉に傷が出来たことを仄めかす。（実はこの小奴の傷は子供の頃に出来たでき物の痕だそうです）

通釈 ではお互いに生きる道を進もうと小奴のうなじにキスをし、手を携えて渚を歩いていけると、遠くに明かりが見えた。その宿は二人が通う喜望楼であった。